

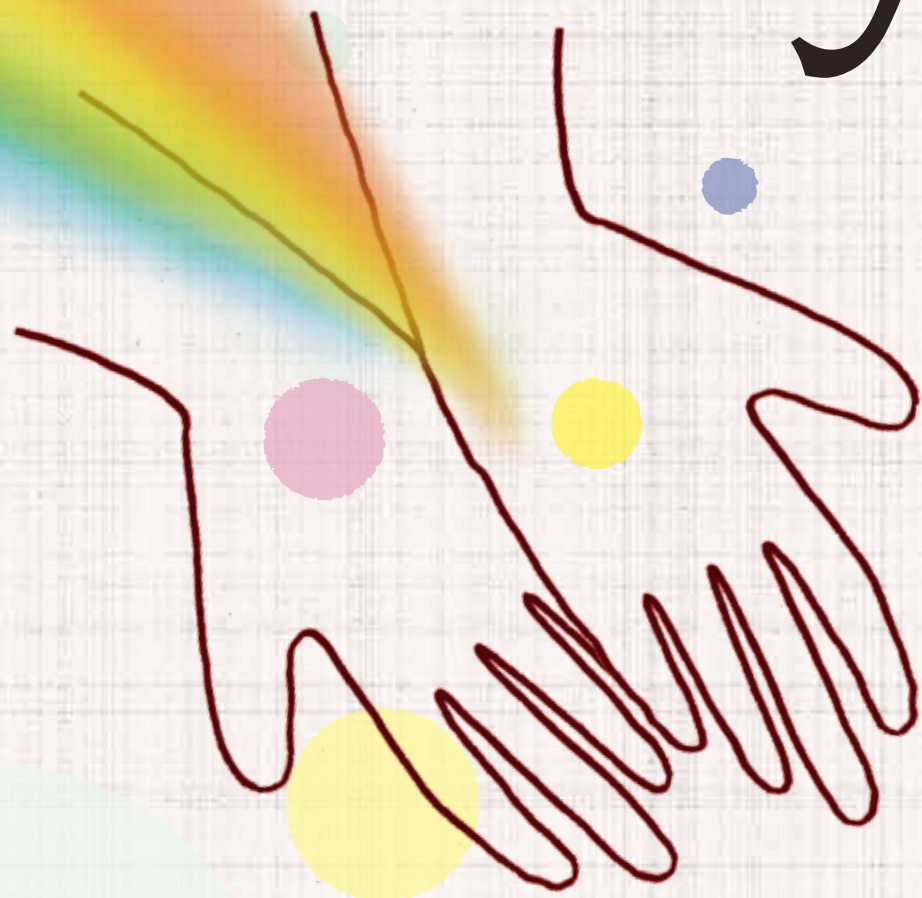
# Women's story

15のものがたり

Women's story

15のものがたり

うらやす  
ものがたり  
編集部



## はじめに

誰もが「ものがたりを持っている」のでは？

そんな思いがこの本をつくるきっかけでした。

人生にはたくさんの分岐点があり、  
だからこそさまざまな可能性があるのかもしれない。

誰もがその分岐点に立ち選択している。  
それをていねいにひろう作業のなかで  
やはり誰もが「ものがたり」を持っていることを実感しました。

ここに登場する女性たちは、  
有名人ではなく、わたしたちの隣で生活する女性たち。

15人それぞれのものがたりをお楽しみください。

そして、最後にあなたの「ものがたり」に  
思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

うらやすものがたり編集部



# contents

はじめに

*story01* 洋裁好きが子供服作家へ、そして… 小野田 恵美子さん 6

*story02* 子育て中に何かはじめてもいいんだ！ 土屋 由紀さん 8

*story03* 母でも社会とつながっていたい！ 兼崎 和加さん 10

*story04* これしかない、私の天職は「編集記者」 川村 求可さん 12

*story05* 仕事も子育ても自分らしく 吉田 里子さん 14

*story06* 原動力は社会への恩返し ランジャン 善子さん 16

*story07* 母が太陽であれば、子は自然に輝いて育つ 佐野 美喜子さん 18

*story08* 支える力のすごさと、本当の美しさ 国立 明子さん 20

*story09* ぜんぶひっくるめて私の人生 宝 綾子さん 22

*story10* 「マクロビオティック」で伝えたいこと 渡辺 万里さん 24

*story11* 浦安でサッカーチームとともに 松山 由加里さん 26

*story12* 家族がいるからこそその自分らしさ 澤田 幸さん 28

*story13* ママは太陽であってほしい!! 山西 絵美さん 30

*story14* 誰かを輝かせることで、自分も輝く 小野寺 真由子さん 32

*story15* 子どもから教わる「知らなかった世界」 橘 友紀子さん 34

浦安市民活動団体 Prism! プリズムのものがたり 36

*story00* もうひとつのものがたりーこの本ができるまで 38

あとがき



W15のものがたりomen's  
story

## 洋裁好きが子供服作家へ、そして...



小野田 恵美子さん Onoda Emiko

■ 39歳 浦安市在住

■ 夫・長女 11歳・次女 7歳

子ども服作家として活動する小野田恵美子さんが、ミシンをもっと身近に楽しむ場として、浦安駅近くに「mishin studio ROE」をオープン。はじめてでも気軽に楽しめるワークショップや、ミシンの時間貸し、こだわりの手芸用品を扱うショップも併設しています。

### 現在の仕事を始めたきっかけ

子どもの頃から洋裁が好きで、バックなどを作ってはお友だちにプレゼントしていました。自分のウェディングドレスや、娘のお宮参りのドレスも手作り。はじめは単なる趣味でしたが、新浦安の子育て支援施設「子育てテラスふらっと」の棚貸し（ミニショップ）に出品したところ、お金を出して買っていただけたことに感動したのが本格的な子ども服販売のきっかけとなりました。子ども服へのこだわりは、素材がよくてシンプルなものであること。上質なものは高価で、手にできる人は限られてしまいますが、私が仕立てれば安価に普段使いできるものとしてご提供できるのではないかという想いがありました。

また、あるイベントでのミシンワークショップ開催をきっかけに、知人が公民館にサークルを作ってくれました。サークルの規模が大きくなって資材の持ち込みなどがたいへんになってきた頃、実家が管理していたテナントを使えるチャンスがあり、とんとん拍子でミシンスタジオをオープンすることになりました。色々な人に助けられ、導いていただき、人のご縁の不思議を感じています。

### 家庭と仕事の両立

お店をはじめてから仕事の比重が大きくなり、子どもたちは自分のことは自分するなど自立するようになりました。以前は外に出かけることが多く、その間は子どもに留守番をさせていたのですが、店舗を持つようになってからは、「お店に行けばお母さんがいる」という状況を子どもが喜んでくれているのがよかったと思います。子どもたちにとってもこのスタジオは自由に洋裁を楽しめる場になっていて、「お店があつてうれしい」という子どもたちの言葉に励まされています。

### これからの目標や夢

子ども服販売・ワークショップ・資材物販の3本柱でやっていますが、なかでも要望の多いワークショップを中心に展開していけたらと思っています。ワークショップに参加したお客さまが、洋裁を好きになったり、苦手意識がなくなったり、集中する時間が

リフレッシュになったり、一人ひとりの生活が豊かになればと思います。子ども向けのミシンワークショップも定期的に開催していきたいです。学校の家庭科でミシンがきらいにならないように、「ものづくりって楽しい!」と感じてもらえたらうれしいです。

### 元気をもらった言葉は何ですか？それは誰からですか？

リピートしてくださるお客さまからの感謝のメッセージや、自分の強みを教えてくれた仲間の言葉。そして、娘たちの「ママのところに生まれてよかった!」の一言です。

### 夢を実現したいママたちへのメッセージ

子どもが小さいときは子どものことで手いっぱいでしたが、ミシンを踏んで制作している時間が大切な自己表現の時間、自由な時間でした。ひとりで制作している間は、何年も同じ状態が続きましたが、仲間と出会ってともに活動するようになって、急に世界が広がりました。悩みを共有することで、自分のやりたいことや求めている方向性もハッキリしてきた気がします。具体的に何がしたいかわからなくても、色々な人と出会って話を聞いたりするなかで少しずつみえてくるのではないのでしょうか。同じような環境にいる人や、一歩先を歩いている人、人生の目標にしたい人など、色々なライフステージにいる人と継続的にコミュニケーションを取るのがよいかなと思います。

#### 取材を終えて

インタビュー前は、「話すことは得意ではない」とおっしゃっていましたが、ご自身の活動について溢れるほどの想いを、途切れることなくたくさんお話してくださいました。店舗を構えたばかりでたいへんなこともたくさんあるとは思いますが、気負うことなく流れにまかせ、人との縁を大切に活動されている姿がとても素敵でした。店舗を持ったことで子ども服以外の縫製の仕事も請負い、新たな展開も楽しんでいらっしやいます。益々のご活躍を楽しみにしております。ありがとうございました。

(取材・文 小野寺 真由子)

## 子育て中に何かはじめてもいいんだ！



土屋 由紀さん Tsuchiya Yuki

■ 40歳 市川市在住

■ 夫・長男 11歳・次男 4歳

高校卒業後、銀行に8年勤務して結婚退職。10年間の専業主婦生活を経て、現在は整体院での託児と幼児サークルの講師補助をしながら、通信大学と浦安市子育て・家族支援者養成講座で保育を勉強している土屋由紀さんに話をうかがいました。

### 子どもが大好きだったけど

高校で就職先を銀行に決めた理由は、はじめて口座を作りに行ったとき担当の人の接客がとても素敵で、こんな銀行員になりたいと思ったからでした。商業科だったので珠算を活かしたいという思いもありました。

その一方で、小さい頃から子どもが大好きで、保育士へのあこがれもありました。当時は、ピアノが弾けないと保育士の学校に入れないと思い込んでいて、自分は保育士にはなれないとあきらめていました。

### いつからでもはじめられる

結婚退職したあと、「子どもが中学生になったらパートで働こう」と漠然と思っていた。あるとき、参加している市民活動団体プリズムのニューズレターで、出産を機に今までとまったく違う仕事をはじめた人の記事を見つけました。経験がない仕事を今から、まして子どもがいてもはじめられるなんて考えもしなかったのが、衝撃を受けると同時になりたいと思う気持ちがあふれてきました。

「保育士になりたい。子育て中でもできるんですね」と保育士をしていた友人に話したところ、「できるよ、やってみなよ」と。その言葉に背中を押され、まずは保育士の学校探しをはじめました。

### 10年ぶりに仕事をスタート

そんなとき、「子どもが好きなら」と整体院の託児の仕事に誘われました。当時、下の子は幼稚園入園前。夫に話してみると、「一時保育に登録できそうならやってみれば？」と。翌年に幼稚園への入園を控え悩みましたが、一時保育を利用しながら10年ぶりの仕事をスタートしました。

しばらくたった頃に、下の子が通っていた幼児サークルのあこがれの先生にここで修行したいと、「弟子入り」を志願しました。子どもたちの名前を呼んで名札を渡すとき、名札を取りにこない子に「じゃあ、あとでもう一回呼ぶね」と先生。サークルの時間が決まっているなかで「待ってあげられるなんてすごい」とひと目惚れでした。たまたま、

ほかの先生が辞めるときで、師匠となる先生も「運命だと思った」と言ってくれました。

### これからのこと

先のことは具体的には決めていませんが、しっかりとした保育に関する知識を身につけて、ママたちに「何でもきいてください」と言える存在でいたいと思い、保育士をめざして勉強をはじめました。土日に通信大学のスクーリングに通っています。学校へ行く日は朝7時半に家を出ますが、休日でいつもよりゆっくり寝ている夫を起こそうか迷っていると、長男が「パパを起こさなくて大丈夫だよ」と声をかけてくれます。そと出かけると、夫はすぐに起きて子どもたちの食事を準備してくれているようです。そんな家族の協力は本当にありがたいですね。

保育や子育て支援の場をとおして、子どもが親の前で言わないことや、親子1対1の育児では気づかないことをママに伝えていきたいです。ママたちが子育てが楽しいと感じ、笑顔でいられるようなお手伝いができればと思っています。

### 取材を終えて

子育て中に前職とはまったく違う仕事をはじめた方がいるということで、お話をきいてみたいと思い、編集部の紹介で土屋さんとはじめて会いました。仕事では、「赤ちゃんに癒されて、サークルの子どもたちの成長に元気をもらい、一方、次男は幼稚園の預かりには入れず、夏休みはシフトをすべて休みに」。家族のペースはそのままで仕事を楽しみ、目標に向かって前進している。そんな姿に、専業主婦の私も前へ踏み出すための勇気をもらった気がします。

(取材・文 岡林有紀)

## 母でも社会とつながっていたい!



兼崎 和加さん Kanezaki Waka

■ 33歳 浦安市在住

■ 夫・長女3歳・第2子妊娠中

結婚、出産後もフルタイムで仕事を続ける兼崎和加さん。仕事と家事を両立し、毎日を元気に過ごす彼女の生活についてうかがいました。

### 職場は社会的な自分の居場所

新卒で入った教育サービス業の会社で働きはじめて10年になります。京都と大阪で室長職を5年務めました。結婚を機に浦安で暮らすことになり、東京の本社勤務になりました。現在は、契約管理や教室立ち上げの際の社内調整、緊急対応の仕事などをしてしています。

室長だった頃は、生徒の笑顔、保護者や講師の喜ぶ顔を見ることにやりがいを感じていました。誰かを元気にしたい、自信を持ってもらいたいと思っていたのです。でも今は、自分のために働いているのかもしれない。仕事をするのが、私にとって不可欠なものとなっています。「兼崎さんがいてくれるから円滑に仕事ができるよ」と言ってもらえることが働くモチベーションになっています。

娘のことは大事に思っています。育休中のはじめの半年くらいは、慣れない育児に奔走し、仕事のことはまったく考えませんでした。復帰する数か月前になると、「働きたい、働きたい」とうずうずしてきました。子どもといっしょにいること、遊ぶことや話し相手になることも大事だとは思いますが、私には「それだけ」ではだめだったみたいです。「子育てと仕事、両方してすごいね」と言ってもらったことがあります。復職して感じたのは育休中に比べて、自分の社会的な居場所があるということ。私は「はなちゃんのお母さん」だけではなく、「兼崎和加」でもありたいのだと気づきました。

### どれも大切

毎朝、6時45分には自宅を出ます。娘は夫と保育園へ行き、私のお迎えは19時ギリギリ。昨年、勤務地が変わってお迎えが間に合わないこともあるので、2次保育に登録しています。

娘は保育園が大好き。お迎えの遅い私にもあたたかく声をかけてくれる先生方に、安心してお願いしています。それでもやっぱり休日になると、娘は夫と私と3人でいたがります。家族が揃ったときは、娘の喜ぶ場所に行くか、家でのおんびり過ごすことが多いです。夫が不在の休日は、最近買った年間パスポートで、娘とテーマパークに行くのが楽しみのひとつです。育休中に仲良くなった「ママ友」といっしょに行くこともありますよ。

仕事、家事、育児と忙しい毎日ですが、それでも私には仕事は欠かせません。経済的なこともあります。もし夫に「働かなくていい」と言われたとしても、私は働きたいと思います。仕事を楽しめるのはもちろんですが、自分で使うお金を自分で稼ぎ、気兼ねなく使いたいという気持ちもあります(笑)。

### よくばって楽しみたい

家事、育児は夫と分担しています。夫は洗濯、私は料理、掃除は気づいた方がするといった具合に自然と決まりました。結婚当初は、しわしわの洗濯物にけんかになることもありましたが、今はきれいに干されています。休日、私に予定があれば、一日中、娘と過ごしてくれます。私、おいしいものに目がなくて、カフェやレストランで友人と食べたり話したりする時間が大好きなんです。そんな風にリフレッシュしているので、ノンストレス!夫に娘を安心して任せられるからこそできることなので、感謝しています。

会社の同期でもある仲のよい友人に、「和加ちゃんは、結婚しても子どもが生まれてからも変わらないね」と言われたとき、そのままの自分を認めてもらった気がしました。私は今のまま、これからもよくばって楽しんでいくつもりです。

### 取材を終えて

和加さんのお話を聞いて、気持ちに正直に生きているところ、潔さが印象的でした。子育て期にフルタイムで仕事をするのは、たいへんなことも多いと思いますが、和加さんはストレスなく過ごしていると笑顔で話していました。夫婦で協力しながらまた折り合いをつけながら、家庭と仕事のどちらにも頼りにされている実感を得られているようでした。日々コツコツとがんばってきたことが、今につながっているのでしょう。母になってから出会った友人として、これからも応援したいと思います。

(取材・文 橘友紀子)

## これしかない、私の天職は「編集記者」



川村 求可さん Kawamura Motoka

- 38歳 浦安市在住
- 夫・長男 11歳・次男 8歳

地域の子育て情報誌の「編集記者」をしている川村求可さんは、2人の男の子のお母さん。結婚前の仕事、今の仕事との出会い、仕事に対する思い、そして、心に残っている言葉についてうかがいました。

### 「編集記者」になるのが夢

小さい頃から文章を書くのが好きでしたが、大学卒業後は札幌で違う仕事をしていました。しかし、夢をあきらめきれず、仕事を辞め、あてもないのに書く仕事を探しました。タイミングよく、地域の情報誌で募集がありました。右も左もわからない新人時代に、今では全国区になった北海道の劇団の担当に。記事を書くだけでなく編集もまかされ「編集記者」として仕事をし、2年半の短い間ながら充実した時間を過ごしました。

### ドリームボードが叶えてくれた、出産後の仕事との出会い

結婚を機に浦安へ。仕事を辞め子育てに専念していましたが、情報誌の仕事が忘れられなかったのか、浦安市の「みんなで子育てハンドブック～ひとりじゃないよ」や「男女共同参画情報誌ポノ・ポノ」の編集にボランティアとして関わっていました。だんだんと、まわりの友人たちが仕事を持ってがんばりはじめ、正直なところ焦りました。市民活動団体プリズムに所属し、多くの素敵な人に囲まれることで、輝いている人に対してのコンプレックスがあることがわかりました。

その頃、プリズムの活動でドリームボードを作りました。ドリームボードとは、「夢が叶っている自分」を書き出すものです。私は『『編集記者』になりました』と書き、そのドリームボードを家の目立つ場所に飾っておきました。ある日、友人がそれを見て、「求人があるよ」と教えてくれたのが今働いている地域の子育て情報誌だったのです。編集は昼夜問わずにする仕事だと思っていた私には、子どもを幼稚園に通わせながらできる職場があることに驚き、うれしくなりました。

### ママからママへ「情報」をつなぐ存在に

仕事をはじめてみると、家事との両立がなかなかできません。もっと時間をうまく使いたいと思うようになりました。本来、悩みを悩みとは思わないのですが、仕事も育児も何もかもがうまくいかず、気持ちが沈み、涙がでてくるがありました。

しかし、ここ1年ぐらいで仕事をまかされるようになってきました。以前は自分と比べてしまいコンプレックスを感じていたまわりの素敵なママたちの力を借り、皆のア

イデアや活動を紹介することで、たくさんのママたちに伝えたいことを発信できています。書きたいことを書けるようになり、「編集記者」が天職だと思えるようになると、自然と涙もでなくなってきました。今の状態がとてもいいと思っています。

### 心に残っている3つの言葉

「求可は作家か新聞記者になりなさい」。小学校の担任の先生の言葉。3年生のときに書いた童話をほめてくれました。この先生とは、今でもつき合いがあります。

「あの劇団の記事を書いていたのは求可さん？」仕事を辞め、北海道の実家近くにある、日本最北端の産婦人科で出産した直後、助産師さんに言われた言葉。その助産師さんは劇団の大ファンだということで、札幌の地域情報誌を取り寄せていました。まさかと思える場所（札幌から車で5時間！）で、私の記事を楽しみにしてくれていたことを知り、充実感でいっぱいになりました。

「動けないときは、動かなくていいんだよ」。再就職前、何をすべきかわからず焦っていた私に、プリズムのみんながかけてくれた言葉。「動かないとだめ」と言われると思っていたので驚きました。今、自分らしい道を選んでいるのはこの言葉のおかげです。

### 取材を終えて

ハツラツとした、かわいらしい方だと思っていた求可さんが、実はコンプレックスを抱えながらも、何事にも一生懸命な素晴らしい女性だとわかりました。今では、求可さん自身がまわりのお友だちと同じく、輝いている人。これからも、仕事に育児にと励んで、近い将来、夢である「本を書く」を実現させてほしいです。

(取材・文 矢澤 有紀子)



## 仕事も子育ても自分らしく



吉田 里子さん Yoshida Satoko

■ 39歳 浦安市在住

■ 夫・長男 8歳

美容学校非常勤講師を務めながら、自宅サロンを開業。2014年、浦安駅前にあらたに場所を借りアロマトリートメントサロン Aromaterial をオープンした吉田里子さん。営業セミナー講師としても活躍しています。今に至るまでとサロンをはじめた思いについてうかがいました。

### 『りこ』と呼ばれる理由

小学3年の頃、『さどこ』という同じ名前の子にいじめられ、自分の名前が嫌いになってしまいました。ほかの誰かになりたい！と何度も考えていたとき、友人が『りこ』と名前を間違えて呼んだことをきっかけに『りこ』と名乗りはじめ、友人に「りこらしいね」と言われ、それ以来『りこ』でいるほうが本当の自分なのだと思うようになりました。

### どん欲に学ぶ

美容に興味を持ちはじめたのは、高校のときです。演劇部の子たちが、普段目立つ子も目立たない子も、役になりきってイキイキしている姿を見て、お化粧ってすごい！と思ったのです。

大学に進学して、お化粧で自分を変えたい！もっと化粧品について知りたい！という思いから大手化粧品会社でアルバイトをはじめました。化粧品の製造を希望していましたが、営業をすることに。今となっては、それが営業セミナーなどに活かされているのですが、そのときは、自分が人前に立って講師をしたり、セミナーを開いたりするとは夢にも思いませんでした。そのとき営業職を拒否せず、どん欲に学んだことがよかったです。

夏休みにカナダへ留学したときのことで。いじめられていた経験から、質問などに積極的に答えられず、理由を先生へ伝えると、「わかることは堂々と答える。わからないことはわかるまで何度でも聞く。ここではいじめはないから、自分に自信を持ってもっと自分を出しなさい」と言われ勇気ができました。

### 本当にやりたいこと

その後、理系の人を探している専門学校を紹介されて、常勤の講師になり、化粧品の成分やメイク・エステを教えるようになりました。そこではフルタイム勤務や全国各地への転勤が求められたため、結婚をきっかけに常勤講師から非常勤講師に。しかし、出産のため退職しました。

産後は、パソコン専門学校の広報として週3日働いたり、パン屋のアルバイトをし

ましたが、やっぱり私は美容の仕事をしたい！と改めて思い、現在の美容学校の非常勤講師となったのです。

### 家庭とサロン

保育園費用は思いのほかかかり、子どもが1歳のときに非常勤講師をしながら自宅サロンを開業しました。17時には仕事を終え、どんなに忙しくても夕飯を作り、家族で食卓を囲むという自分のポリシーは崩すことなく働きました。

自宅サロン開業から4年半経ち、お客さんが増えてきたので、あらたに場所を借りることにしました。子どもに「いつでも近くにいる」という安心感を与えたいということから自宅の近くに決めました。自宅で印刷していたチラシを業者へ注文したり、価格についても見直すなど意識も大きく変わりました。

でも、ポリシーを崩さずに働く、というスタイルは、自宅サロンのときと変わりません。仕事のスタイルは子どもの成長とともに変わるもの。息子が小学校を卒業するまではこのスタイルを続けたい！と思っています。息子からの「ママは困っている人を助けているね」というメッセージは、私の力・元気の源です。

### 取材を終えて

インタビュー中『りこ』と呼ばれる理由』という話のなかで、りこさんの涙をはじめて見ました。「どん欲に学ぶ」という姿勢が、今のセミナーやサロンにつながっているのだなと思いました。サロンは子どもへの思いがあり、繊細で温かい印象でした。どんなに忙しくても、手作りご飯で食卓を囲むというポリシーを崩さず2倍速で動く、りこさん。ママとしてもセラピストとしても素敵だなと思いました。

(取材・文 山西 絵美)

## 原動力は社会への恩返し



ランジャン 善子さん Ranjan Yoshiko

■ 40歳 浦安市在住

■ 夫（インド国籍）・長女10歳・次女8歳・長男5歳

ランジャン善子さんを知る周囲の人たちから聞こえてくるのは「すごい」「さすが」などの言葉。彼女は常に頼られ、まわりには人が集まります。その所以とは何か、彼女のルーツはどこにあるのか、それを探りたくて、取材させていただきました。

### 枠にとらわれない学生時代

善子さんは、枠にとらわれることがありません。それは幼少期からのこと。小学生の頃は地元のサッカークラブに所属していましたが、女子は彼女だけでした。試合への出場は男子のみというルールがあり、公式戦に出ることはありませんでした。中学でサッカー部に入部を希望するも、そこでも前例がないと断られます。結局陸上部を勧められて入部し、おもに砲丸投げの選手として大会に出場しました。

高校生になった彼女は、マネージャーでもチアリーダーでもなく、応援団に入団しました。初の女子団員として学ランを着て男子と同じ練習をこなし「筋肉マッチョの女子高生だった」と当時を振り返っています。

### 大好きな会社で

大学ではインドについて学び、インドへの短期留学中にのちの夫となる男性と出会いました。卒業後は、地元北九州の貿易商社に勤めたあと転職。フィリピン・セブのホテルに勤務しました。

結婚を機に退職して日本に戻った善子さんは、大好きだった大手航空会社で働きはじめました。ほどなくして仕事の功績と愛社精神が認められ、管理職としてフルタイムの契約社員に。ちょうどその折、会社がほかの航空会社と経営統合したのです。1人めの妊娠がわかった頃でした。社内が混乱した時期でしたが上司の支援により、正社員となり産休を取ることができました。2人めの育休復帰後、半年間ほど勤務していましたが、子育てと両立することが困難となり退職しました。

「当時は退職せざるを得なかったことを、夫と子どものせいにして、ネガティブな思いでいっぱいでした」。

### インドと日本の架け橋に

どの職場でも上司に恵まれ、会社と仕事が大好きだった善子さん。子育て中心の生活にしばらく鬱々としていました。しかし「せっかくインドの人と結婚したのだから、インドと日本の架け橋になるような事業をおこそう。夫の国であるインドに関わってい

たい」と考えるようになります。

「インドにはマニキュアをしている人が多いのにサロンが少ない」とネイル産業に注目し、メーカーのプロネイリストの資格取得をめざしました。3人めを出産した後で忙しい毎日でしたが、無事に資格を取得しました。

ビジネスはすぐにうまくいったわけではありません。家庭との両立ができず中断したときもありましたが、2014年春、現地法人の立ち上げに着手することができました。

ネイリストの資格取得でお世話になった会社にも恩返しをしたいと言う彼女は、現在、同社海外事業部でも活躍しているそうです。

「浦安は夫婦ともにその魅力に惹かれて引っ越してきたまち。子どもたちもこのまちで育って、たくさんのお友だちに恵まれました」。浦安とインドを往来する、多忙な毎日を送っています。



### 取材を終えて

凛とした佇まい、堂々とした振る舞い、美しい声と正しい言葉遣い。そんな彼女を作り上げたのは、枠にとらわれず挑戦し続けることを選択してきた彼女自身でした。お世話になったところには恩返しを考えると、その姿勢が、人から頼りにされ、また、彼女のまわりに人が集まる所以なのでしょう。 (取材・文 吉野 智美)

## 母が太陽であれば、子は自然に輝いて育つ



佐野 美喜子さん Sano Mikiko

■ 60歳 墨田区在住

■ 夫・義理の母(子どもたちは独立)

今年還暦のダンスインストラクター。現在、都内のスポーツクラブで、週に13本、多い日は一日に5本のレッスンをこなし、ハードな毎日を送っている佐野美喜子さん。3人の子どもたちはすでに独立し、6人の孫がいるパワフルな女性です。

### ダンスインストラクターとして

現在のレッスン内容は、有酸素運動エクササイズのエアロビクス、ラテン、キックボクシング、ズンバ。ゆっくりとした時間の流れるエクササイズであるヨガやピラティス、アクア、ステップ、BOSU、足裏セラピーも行います。

レッスン中に、メンバーさんと笑顔のキャッチボールができるのが楽しいし、何より楽しんでくれている姿を見るのはインストラクター冥利に尽きます。

### 結婚から現在までの道のり

18歳で結婚。19歳で長女、21歳で長男、24歳で次女を出産しました。32歳で離婚し、42歳で再婚。現在は、夫と、大病を患い闘病中の義理の母と暮らしています。

27歳のとき、友だちから「何かサークルを作り、子育て以外も楽しもうよ」と誘われたことがきっかけで、先生をよび、当時流行していたジャズダンスのサークルをはじめました。そこからダンス魂に火がつきまして。幼稚園児や小学生にダンスを教えはじめ、地元のお祭りに子どもたちを出演させたのを機に、もっと本格的にダンスを教えたいと思うようになりました。

その後、離婚。引き取った子どもたちを女手ひとつで育てることにただただ必死でした。正社員として働きながらの育児。子どもたちの習いごとの送迎などもあり、自分の趣味にかける時間なんてまったくありません。忙しい日々を送っていました。子どもたちも独立してほっとした頃、長女と通いはじめたスポーツクラブで、今の夫と出会い再婚。子どもたちには「お母さんがはじめて女性に見えた」と言われました。同じ頃、通っていたスポーツクラブから声をかけていただき、46歳からインストラクターとして活動をはじめました。第2の人生スタートです！

### 波乱万丈な人生なのかもしれない

離婚をして一番つらかったのは、長男を引き取れなかったこと。当時、小学6年生だった長男は「お父さんのそばから子どもが全員いなくなるとかわいそう。お父さんといっしょに暮らす！」と決断をしました。長男と暮らせなくなったことに加え、彼がしばら

く私を恨んでいたことは、さらに辛いことでした。「波乱万丈」と言われますが、悩みと思えるようなことでも、それを「悩み」と受けとめず、前を向いて進むしかなかったのです。

その生き方はこれからも変わることはない。とにかく上を向いて歩く！“笑う門には福来たる”ですよね。そんななかで、3人の子どもたちは多くを学び感じとり、成長してくれました。子どもたちにも貴重な経験になったと信じています。

### パワーの源は「海外旅行」と「孫」

色々ありましたが、今は刺激的で楽しい毎日です。趣味はダイビング。年に何度も海外旅行をします。世界の海、地形を見るのが何より楽しいですし、それがパワーの源ですね。

また、孫の成長を近くでみていっしょに遊ぶことも楽しいです。3家族、14人で行く夏恒例の国内旅行は、今年で7年めとなりました。孫たちの予定が合う限り企画し続けます！

### 取材を終えて

彼女は、私の母です。母の大きな背中を見て育った3人きょうだいの一人が私。その堂々とした大きな背中、いつもまぶしくて仕方ありませんでした。私も母と同じ道を進み、現役ズンバインストラクターです。いつまでも健康で輝いている母を目標に、これからも一日一日を大切にしていきたいと思い、還暦の記念に母取材しました。



(取材・文 田原 美和)

## 支える力のすごさと、本当の美しさ



国立 明子さん Kunitate Meiko

- 78歳 岐阜県在住
- 夫と二人暮らし(子どもたちは独立)

昭和11年生まれ之母は、身近でありながら、最も強く、最も美しい尊敬すべき女性です。夫がおこした会社を全力で支え、4人の子どもを育て、なのになぜか苦勞を感じさせない。その秘密を知りたくて、話を聞きました。

### 厳しく優しくった父

生家は函館。父の勧めで6年制のミッションスクールに入学。高校時代は宝塚や松竹歌劇にあこがれながら、医学の道を志しました。でも父に反対され、すねて映画や文学、ファッションに夢中になったんです。東京の大学に入りたと言ったときも猛反対されましたが、泣いて説得しました。とても厳しい父でしたが帰省した吹雪の日、汽車と船に酔って心細い気持ちで玄関に着いたら、父がでかけるところで…私は思わず腕に飛び込んで泣いてしまいました。父はでかけるのをキャンセルしてくれた。7人きょうだいのなかで一番父に反抗して叩かれたりしたけれど、あのときは父のあたたかさを感じました。

### 父との別れ、そして決断

大学2年の夏、その父が突然脳出血で倒れて逝ってしまいました。父の事業の引き継ぎや親戚内のゴタゴタ…。病気で休学していた私は、いろんなことが嫌になってそのまま退学し、札幌の兄のもとへ。何となく通いはじめた編み物学校の先生の勧めでファッションショーに出演し、モデルへと誘われましたが、自信がなくて断ってしまいました。そんな頃、母がお見合い話を持ってきたのです。

相手は小さな商店の長男。私も自営の家で育ったから、結婚するなら小さくても商売をしている人と思っていました。それで、数回しか会っていないのに結婚を決心したの。私はどちらかという夢みるタイプだけど、彼はとても現実主義な人だと思った。計画性もあって、谷に落ちてははい上がってくる力を持つてる人だと感じたんです。おじが「明子はお嬢さん育ちだから3日と続かない」と言うのを聞いて、「私、絶対に絶対に幸せになる!」と、大きな覚悟を決めました。

### 夫とふたりで歩んだ道

結婚して2年ほどで、夫が独立。ふたりで岐阜に移り住み、アパレルの会社をおこしました。最初は知人もなく銀行の口座を開くのもひと苦勞でした。でもなぜか心配しなかった。夫を信頼していたから。会社の危機は何度もあったけど、そんなときに私が暗

くなってはだめだといつも明るくしていました。

子ども4人と住み込みの従業員3人の食事のしたく、掃除、洗濯をこなし、帳簿をつけ、生地仕入れに京都や東京に行き…とにかく多忙な日々。人手不足から服のデザインや企画までするようになり、家族が寝てから型紙を作る勉強をしました。

昔からファッションは好きでしたが、裁縫が苦手だから仕事にはできないと思っていた。それが思わぬ形で実現して…たいへんだけれど楽しい日々でした。

### 多忙な日々のなかで大切にしてきたもの

そんな忙しい毎日のなかでも、時間を見つけて体操に行ったりしていました。夫に恋していたのかしら。現実的なわりに俳句を読むなどロマンチックなところもあり、そのギャップや私にはない発想がとても新鮮でした。だから、ほかの人にとられないよう、きれいでいなきゃって(笑)。息子は「ふたりの仲がよかったから道をそれなかった」と言ってくれた。思えば仕事も家庭も子育ても夢も、いつもふたりで語り合って、夢中で向き合ってきました。5年間で4人の子どもが生まれて子育てに悩んだ時期には、母から「親がどうであれ子どもは自分の運命を持つてるから大丈夫」と勇気づけられました。大きな病もせず、今はみんな家庭を持ち元気でいてくれる。私がこの世に残したものだと思っています。

#### 取材を終えて

母が持つ、表舞台には出ない支える力のすごさ。その人生に対する覚悟や全身全霊で挑む姿勢は、母が祖父から受けた愛情が源になっているように思えました。容姿を褒められがちな母ですが、当の本人は無自覚で、思い切りがよくて、どこか少女のような。その無邪気なたくましさこそが、母の本当の美しさなのかもしれません。私もあるがままの自分を信じて生きていきたい。取材を終えてそう感じました。

(取材・文 古市佳予子)

## ぜんぶひっくるめて私の人生



宝 綾子さん Takara Ayako

- 73歳 浦安市在住
- 夫と二人暮らし(子どもたちは独立)

何事にも動じず、誰にでも声をかける宝綾子さん。スカートが短めの高校生には、「冷えは禁物よ！タイツを履いたりして。からだ大事にしてね」。赤ちゃんを抱いた女性には「生んでくれてありがとうね。たいへんなのは小さいうちだけだからね」と席を譲ります。そんな肝っ玉母ちゃんの人生を嫁の私が取材しました。

### あたしはね、仕事と再婚したの！

子どもは男の子3人。末っ子が3歳のとき、知人に紹介されて保険会社に就職したの。夫は、400年以上続くお寺の息子、品があって背が高くハンサム、まじめでお酒も飲まない。私の親は、それはそれは夫を気に入って結婚させた。ただ、彼は優しすぎるのね。お給料は他人のために使ってしまうから、このままじゃ、ロースハム一枚満足に食べられないって危機感にかられて、それで仕事に就いた。

当時、世間では生命保険の外交というとばかにされて随分な目にあったけど、“あたしはこの会社と再婚したんだ”と思って、会社に尽くした。大企業の重役さんたちから信頼されてね。大手航空会社の資産運用もしていたわ。たとえばね、5億円お預かりして7億円にするのよ。ただ、私が働くことで子どもを犠牲にってしまったかもと、今でも涙が出るけどね。でも、そのおかげで会社では9万人いる営業のなかで2回も営業売上1番を取って、トップセールスレディとして大切にされたのよ。

### 海外旅行が好きなわけ

仕事をしていた頃、ヨーロッパには25回は行っているわね。とくにスペイン、ギリシャ、イタリアが好き。というか、日本があまり好きじゃない(笑)。父親が徴兵され戦死したと思っていたら、私が6歳のときに戦地のルソン島から帰還し、その風貌があまりに恐ろしくてその日から“父”とは思えなくなった。貧しい生活に追われる母も余裕がなかったのね、私のことをいつも叩いて。だから、父や母が亡くなっても、涙ひとつでなかったわね。そんなわけで生まれ故郷に愛着はない。その反動かもしれないけど、ヨーロッパの風景にあこがれて、海外に行きたいといつも考えていたの。

48歳のとき、4度めのローマ旅行で、セリーヌで買い物をした後、でてすぐ脇のひとけ人気のない細い道に入ったとき、2人のギャングにつけられていることに気がついた。夢中で逃げていたなら見知らぬ紳士を見つけたの。とにかくギャングの仲間ではないことを確認して必死で助けを求めて、何とかギャングを巻いた。その人が名刺をくれて、そうしたら何と誰もが知ってる大手飲料メーカーの副社長。今でもその名刺は財布のなかに入ってる。辛いときにそっと取り出して眺めると、そのときのスリルと安心感、それ

にバリバリ稼いでいた元気な自分がよみがえるようで、気持ちが明るくなるの。

### 働き続けたからこそできたこと

働き続けた理由は2つ。3人の息子に十分な教育を受けさせたいという思いと、彼らが結婚したときにきちんと家を持たせたいという思いから。長男と次男にはそのとおり家を与えたけれど、三男は抵抗して絶対には買わせてくれないわね(笑)。

私は6人きょうだいで長女の私だけを進学させてくれなかった。いつも学年で3番以内だったのに。そのことを思うと今でも悔し涙が出るのね。子どもの頃は、弁護士や代議士になって弱い立場にある人の代弁者になることを夢みて一生懸命勉強していた。だから息子の夢は絶対に叶えたいって。今では、長男は会社経営、次男は鉄道会社勤務、そして三男は地方議員として大好きなこのまちへの恩返しのためみなさまに尽くしている。それは私の夢でもあったのかもしれないわね。

ぜんぶひっくるめて私の人生。仕事にも遊びにも全力投球、好き勝手させてもらった母ちゃんだけど、孝行息子たちを誇りに思うわ。存分に働かせてくれた夫にも感謝してる。私が死んだら、骨はエーゲ海にまいてちょうだい(笑)。

### 取材を終えて

お義母さんの武勇伝は、とてもここではすべてを書ききれませんでした。道端にたむろっているヤンキーがいると、いつも迷わず声をかけ、ペプシを酌み交わしちゃうぶっとなだ彼女には、ちよっぴり悲しい子ども時代と切ない子育ての記憶がありました。そんな彼女に3人の息子たちは、抵抗しつつも頭があがらないのです。「母ちゃん、愛してる！長生きしてくれ！」

(取材・文 宝 祐子)

# 「マクロビオティック」で伝えたいこと



渡辺 万里さん Watanabe Mari

- 46歳 市川市在住
- 夫・長女 11歳・次女 6歳

マクロビオティックという食事法を家族と自分のために取り入れようと本格的に勉強をはじめ、今では教室を開いている渡辺万里さん。マクロビとの出会いから現在に至る思いをうかがいました。

## マクロビオティックとの出会い

10年前、夫が病気を患いました。「自宅での経過観察を」と言われ、何か自分にできることはないかな…といろいろ調べたときにマクロビオティック（以下、マクロビ）という食事法に出会いました。

マクロビとはおもに玄米を食べ、動物性の食品をあまり摂らず、根菜などを中心に摂る食事法です。野菜は皮をむかずまるごと食べる方がよいとされているので、有機や無農薬栽培のものや、調味料も添加物や農薬が少ないものを使用します。マクロビを実践する上で、「夫だけにマクロビを」というのはたいへんだとよく調べてみたところ、自分や、子どもにもよいということがわかりました。そこで、家族全員でこの食事法に取り組んでみようと思ったのです。

## 本格的にマクロビを学ぶ

最初は何を作ったらよいか、何を使ったらよいかもわからなかったので、まずはスクールを探しました。その頃、上の子は1歳半。助産院に併設された子連れでもOKのスクールを見つけ、車で40分の距離を週2回通うことに決めました。

初級から上級までを受講後、せっかくならもっと学びたいと思いました。ちょうど子どもが幼稚園に入り時間ができたので、行ける環境や条件がそろっていたのです。何か背中を押されたように、本校の師範科を修了することができました。

その頃、2人めを妊娠。妊娠生活は順調でしたが、鉄分が足りないと言われた時期がありました。そこで、鉄分の多い雑穀を玄米に追加して炊いたり、料理に加えたりしました。数値が戻ったときはマクロビのよさを実感し、うれしかったことを覚えています。

## マクロビを伝える活動をととして

「ママ友」からの希望もあり、公民館やマンションの集会所でレッスンをしています。こういう食事があることを伝えるなかで、食べ物には一つひとつ意味があることを知ってもらえればと思い活動しています。また、レッスンではヘルシーなおもてなし料理なども作ります。

「からだを気遣いながら、毎日のメニューを決めるようになりました」「教室で習ったメニューを何度も作りました」と言われ、とてもやりがいを感じます。

マクロビをはじめて10年め。夫の病気は悪化することなく、私を含め家族は健康そのもの。その上、まわりの人にも伝えることができ、得ることがたくさんありました。

## いろいろな選択肢があるっていいこと

マクロビを実践していると、動物性食品を子どもに与えないという点について、まわりから批判的な意見を聞くこともあります。一生取り入れていこうと思っているところに、「まだやっているの?」と言われたことも。

落ち込むときもありますが、食事法は完璧である必要はない。マクロビも選択肢のひとつ。こんな食事法もあるんだと知ることで世界が広がると思うのです。それは子育てとも似ています。「こうしなきゃいけない」や「ちゃんとしなきゃ」と不安を抱えることもありますが、子どもは一人ひとり違いますし、子育てにも決まりはない。いろいろな選択肢のなかから自分に合ったものを選び、きっちりし過ぎないことがいいですね。マクロビから教えてもらったことです。

### 取材を終えて

家族のためにはじめてマクロビをきっかけに、食の知識を身につけ、さらにそれをまわりの人にもお伝えしていきたいという気持ちが、愛情のこもった料理とともに伝わって、みんなを笑顔にしているのだなと思いました。便利さが優先される現代には、本当はからだによくないものもたくさんあるのかもしれませんが。からだにいいことへの探求心を忘れない万里さん。夢は「イギリスへ移住すること!」と目をキラキラさせながら話してくれました。今後、ますます素敵に輝かれることを期待しています。

(取材・文 小崎乃倫子)

## 浦安でサッカーチームとともに



松山 由加里さん Matsuyama Yukari

- 47歳 浦安市在住
- 夫・長男 24歳・長女 22歳

松山由加里さんは、浦安 JSC（ジュニアサッカークラブ）のコーチです。そこは幼児から社会人まで幅広いチームを有する団体で、プロコーチからの指導もあり、技術はもちろん、人として大切なことも教えているそうです。コーチとして現在感じていることや学んだことなどをうかがいました。

### コーチになったきっかけは？

長男が幼い頃、浦安 JSC に入部し、最初はその練習を見ていました。その後、「合宿のときに看護や精神面のケアのために手がほしい」ということで、お手伝いするようになったのがきっかけです。日本サッカー協会には、A から D ランクまでの指導資格がありますが、D ランクの資格を取得し、子どもたちを指導しています。

### 指導のポイントは？

小学生までは、幼さもありストレートに伝えなければ理解してもらえないことがあるので、一人ひとりをよく観察するようにしています。その上で、積極的で元気な子にはさらに気分がのるよう盛り上げたり、消極的な子にはできたことをたくさんほめたり、私からたくさん声をかけることを心がけています。中学生になると、礼儀を重視します。思春期ですから、保護者から心配ごとを相談されることもあります。場合によってはその内容について監督に相談し、子ども本人に伝えることも。その際、監督や保護者の深い思いをできる限りきちんと本人に届けられるよう、細心の注意をはらいます。

### 「サッカーをやめたい」と相談されたときは？

小さい子の場合、サッカーがきらいになったのではなく、それ以外の原因からやめなくなることもあります。例えば、いっしょにやっている仲間とうまく関わっていないときや、応援に来た親のことが気になりすぎて、試合で力を発揮できずに気落ちしてしまったときなどです。また、受験の関係でやめてしまうこともあります。どうするかは、各家庭で判断することです。ただ、嫌になってやめたわけではなく、いろんなことを乗り越えながら続けてきたと思うので、またどこかでサッカーに関わってほしいと願っています。

### 保護者とコーチの両方を経験して感じることは？

親って、気になることがあるとつい細かいことまで子どもに聞いたり言ったりしてしまいますよね。でも子どもにとって親は身近すぎて、逆に言えないことも。そんなとき、

親ではない私には話せることもあるようです。

また、かつては自分の子どもをこのチームに通わせていた経験がある私が監督との間に入ることで、保護者が監督に要求していること、逆に監督が保護者に協力してもらいたいことなど、やり取りがスムーズになって双方の距離が縮まったように感じています。

### コーチをしていて元気をもらった言葉は？

「松山コーチがいると安心する」と言われたとき、とてもうれしかったです。また、サッカーをはじめから、子どもたちだけではなく、本当にたくさんの人と出会うことができ、「私は人と関わるのが好き」ということを再確認しました。私の元気は、人との関わりから生まれていると実感しています。

私は早く結婚したので、子どもたちが成人した今、若い頃にできなかったことをやりたいと思っています。浦安 JCS にはママさんサッカーチームもあり、私も週 1 回、市内のグラウンドで練習をしています。チーム内には還暦を過ぎても活動している人もいて、私も将来そんなふうになりたいです。

### 取材を終えて

日々の生活のなかで、相手を思えばこそ伝えた言葉がうまく届かなかったり、心のなかではすごく思っているのに声に出せない言葉があります。そんなとき、そばにいてその声を聞いてくれる人の存在があったら、これほど心強いことはないと思います。人生のなかでそんな人にめぐり逢えたなら、とても素敵なことではないでしょうか。松山さんのお話をうかがい、そのことを深く感じました。（取材・文 手柴 真理子）

## 家族がいるからこそ自分らしさ



澤田 幸さん Sawada Yuki

■ 34歳 浦安市在住

■ 夫・長女4歳

澤田幸さんは、着付師としての仕事をしながら、市民活動団体プリズムに所属し、子育てママの起業を応援しています。それらをとおして、ますます自分らしくありたいという思いと、母として妻として家族に寄り添っていたいという気持ちから、仕事のスタイルを模索中です。

### ママとしての「私」が「自分らしく」いるために

幸さんは結婚を機に故郷の奈良県から、浦安に移り住みました。出産後は、テーマパークへ年間パスポートで通ったり、「ママ友」とランチをしたりという生活のなかで、「確かに楽しい部分もあってんだけど、受け身ばかりのようで物足りひんよように感じた」と言います。着付師として仕事をしようにも、自宅から遠方への派遣依頼が多く、幼い長女を預けることに不安な気持ちを抱いていました。地域で仕事ができないかと考えていたところ、市民活動団体プリズムとの出会いが幸さんの転機となるのです。

「子どものそばにいながらも、自分らしさを探求し表現し続けたい」とプリズムで活動するママたちは、イキイキして見えたそう。出産前とは違った仕事スタイルを模索している人や、何かにチャレンジしている人たちに会いました。そこで、プリズムの事業のひとつ「プリズムエッセンス（専門知識をもつ会員による講座）」の運営担当として自ら手を挙げました。この団体の人間関係やメンバーの人柄をより知るために実際に自分がスタッフとして動いてみたい、という気持ちからでした。

さらに翌年、長女が入園した幼稚園のPTA会長をかってでました。「外側からイヤイヤ言うのイヤやねん。裏方の仕事が好きやし、イベントを作る側にまわりたい。実際にやってみると『こんなこともやんなアカンはや』と発見があるから楽しい」。そう考えるのは昔からで、小学校時代は児童会長、中学時代は生徒会役員、高校時代は生徒会会長を経験。その性分は子育てをしている今も変わらないようです。

### 喜びと葛藤

「プリズムフェスタ」という年に一度のイベントでは、幸さんが娘さんに着物を着せ、パパと娘さんがモデルとして「着物ショー」に出演しました。日頃から幸さんの活動に理解を寄せている家族みんなで協力し合い、大切な時間となりました。

所属している着付けのNPO法人では、年に一度開催される着付けに関するイベント準備が深夜にまで及ぶことがありました。長女を同席させる日があり、つき合わせることにとても心が痛みました。充実感を得ながらも、忙しさのあまり気持ちが混乱し、長女の前で泣いてしまうことがあったという幸さん。「長女は、『自分がお母さんを泣かせ

てしまったのか』と不安そうな顔をする。それがすごく申し訳なかった。とにかく、『あなたのせいで泣いてるんやないよ』と声をかけたけど涙は止まらへんかった。どんなに忙しくしていても、娘のことはいつも心にあるんやけど、細やかにみてあげられてるんかと不安はあるねん」と遠くを見やりました。

### 夫へ「ありがとう」

日々の努力で、着付師としての幸さんは少しずつ地域で知られるようになりました。入学式や卒業式などの着付けの依頼が入ることもあります。悩んだり迷ったり立ち止まったりしたときには夫の言葉を思い出すそうです。

「目先の収入にとらわれんでええよ。何をめざしてるん？ゆきちゃんは大器晩成やから大丈夫。心配せんでええ。絶対実を結ぶって。地域活動とかボランティアとか、好きなこと、心が向くことをしてたらええねん。自分を信じて、そして応援してくれてはる仲間を信じて、ときには甘えて、努力していれば大丈夫や。そうしていればゆきちゃんの力が発揮できるんやから」。

### 取材を終えて

まあ、なんて素敵なハズバンド！インタビュー時間はなんと6時間におよびまして、生い立ちから何から気さくにお話ししてくれました。そのドラマたるやとてもここには書ききれませんので、幸さんの現在の姿に焦点を当てました。ところで幸さんのお話の8割は、ご主人への感謝と家族があることの幸せなお気持ちを述べておられました。「夫が私にすごく惚れているのはわかる」と。今度はハズバンドにお話をうかがってみたいものです。

(取材・文 宝祐子)



## ママは太陽であってほしい!!



山西 絵美さん Yamanishi Emi

■ 32歳 江東区在住

■ 夫・長女5歳・次女5か月

自宅でトリートメントサロン「向日葵<sup>ひまわり</sup>」を営む山西絵美さん。長女の出産を機に、おんぶして資格を取りにいき、サロンをオープンして4年。その仕事や想いについてうかがいました。

### 出産前はどんな仕事に？

証券会社で営業職でした。数字に追われる毎日でしたが、飛び込み営業も苦でなく、楽しかったですし、新人のときに営業成績で表彰されたこともありました。育児をしながら続けられる仕事内容ではないと思ったので、出産を機に退職しました。今、仕事にしている美容にもエステにも当時は興味がなく、行ってみたいとも思いませんでした。

### 今の仕事をするきっかけは？

産後、授乳でからだがつらくて、4か月の子どもを抱えてマッサージに行ったら、「子連れは周囲に迷惑です」とはっきり言われたのがショックでした。その後、探し回って見つけたのが、赤ちゃん連れで行ける「ママ」がやっている自宅サロン。その「ママ」の人柄と雰囲気が入って、マッサージに通いながら技術も習いました。徒歩20分の道のりを半年くらい通ってようやく資格を取得したのです。5か月の娘は1歳になっていました。

### なぜ、その資格を仕事にしたのですか？

とにかく仕事をはじめたかったのです。子どもはかわいくて仕方がないのですが、子育てだけでは社会とのつながりをなくしたようで孤独感がありました。スーツ姿の女性を見ると焦りました。スタートは何でもよくて、あれこれ考えずにただ何かはじめたいという気持ちだけは強く持っていました。最初は娘を預ける気持ちがなかったので、できる範囲のことをしようと。そのなかで自分が救われた子連れOKのサロンを仕事にすることで、同じ境遇の人を少しでも助けられたらと思い立ちました。

### お客さまはどのように作りましたか？

江東区のママたちが作る情報誌に掲載をお願いし、公共施設に置いてもらいました。妊娠したときにはじめてブログを、子育て日記から自宅サロンの紹介に変えるなど手探りでした。そうやって、がむしゃらに動いたことで徐々に不安を解消できました。仕事をすることで、これでいいんだと自信が持てるようになりました。

### 仕事をするなかで、ミッションだと感じることはありますか？

私のサロンは子連れOK。まず、子どもといっしょに来てリラックスしてほしいです。次はママになっても自分の人生があるということ、ひとりの時間も大切だということ、きちんと伝えていきたいです。

私自身もそうでしたが、子どもを預けることを悪いことだと思ってしまうママもいるのです。私の場合は、まず、祖母に預けてみる、次は一時保育と徐々に慣らしていきました。場所を与えられたらママと離れても楽しめると、私はかなり時間がかかってわかりました。子どもはリフレッシュしたママが好きですよ。

私のサロンで預けることについて話すことがひとつのきっかけになり、預けてみようという気持ちになってもらうのも私のミッションかもしれません。実際にそういうお客さまもいました！

### 元気をもらっている言葉はなんですか？

お客さまから、「子連れで来られてよかった」と言ってもらえると役に立っていると感じて元気がでます。娘からの「ママはがんばってるね、マッサージじょうずだもんね、私にもやって」という言葉はうれしいですね。

### 取材を終えて

山西さんはひとりで「熱い人」でした。取材では質問のこたえ以上の想いがあふれて話が止まりませんでした。「向日葵」というトリートメントサロンの名前も、「ママは太陽であるべきだ」という熱い想いからつけたそうです。ステージが変わっても、そこで新たな道を見つけたり、「あまり考えずに飛び込んで始めてみるのも楽しい」と言っている元気な姿が印象的でした。取材も2人め出産の直前にも関わらず、どこでも行きます！！とフットワークが軽く、元気な人だから周囲を元気にできるんだなと感じました。

(取材・文 吉田里子)

## 誰かを輝かせることで、自分も輝く



小野寺 真由子さん Onodera Mayuko

■ 43歳 浦安市在住

■ 夫・長女12歳・次女9歳・三女6歳

たおやかな笑顔が魅力的な小野寺真由子さんは、結婚式で花嫁の介添えを務める「チャペルアテンダント」。3人の女の子を育てながら、十数年来の夢だったブライダル業界に飛び込んだ彼女に、その一歩を踏み出すまでの物語をうかがった。

### あせり

真由子さんとブライダルの世界との出会いは、20代の頃。趣味で習っていたフラワーアレンジメントでブライダルブーケを作ったとき、その美しさに心を奪われ、興味を持った。「仕事をしながらブライダルの学校に通いました。でも、クラスに30人ぐらいいたなかで実際に仕事にしたのは1人だけ。私自身も転職より結婚を選び、自分の結婚式をプロデュースして、気持ちに区切りをつけたつもりでした」。子どもを3人産み、10年間は育児に専念——何となく思い描いていたとおりの道を歩み、40歳を目前にした頃、急に「何かしなきゃ」とあせりを感じはじめる。「求人広告を見たりしましたが、自分に何ができるかと考えたとき、自己評価がダウンと下がってしまっ」。

### 自分を変えたい！

ホテルの採用説明会などに参加するものの、まだ小さかった子どもたちの保育料の方が時給を上回る現実。子どもを預けようにも夫はあまり協力的ではなく、実母にも「3人はちょっと…」と渋られてしまう。何もかもがうまくいかない。

うまくいかない原因は？と考えた。「自分のなかにもそれはあるんじゃないだろうか」。自分の意識を変えたいと思った。まずは今できることをやってみようと、セミナーなどに積極的に参加しはじめる。「あるセミナーで“ノートに夢を100個書け”と言われて…悩みましたね。絞り出すように100個書いたなか『人の役に立ちたい』というのがあったんです。その頃PTAの役員に誘われて、やってみようかなど。人前に出るのが好きではなかったんですが、いろんな人と関わるうちに気持ちが前向きになりました。仕事をしている人もいて、その考えに触れることはすごく刺激的でしたね」。

### チャレンジ、再び

その後もセミナーやワークショップへの参加を続けた真由子さん。「あるとき『ヒーローインタビュー』というワークで、“成功した私”になりきってインタビューし合っただんです。そのとき私が設定した未来の自分は“ウェディングレッスン講師”。自分の本心に気づき、『やるしかない！』という思いが改めて湧き上がってきた瞬間でした」。

がむしゃらに「未経験者可」の職場を探し、面接を受けた。そうして出会ったのが、現在の「チャペルアテンダント」という仕事。働くにあたり、もう一度周囲に協力を求めた。「たぶん夫はまだ、心からの理解はしてくれていないと思うんです。それでも、協力してくれるようになりました。何より、夫ひとりで子どもと向き合う時間が増えたせいか、夫と子どもたちの関係が親密になったみたい(笑)」。

### 答えは自分のなかに

研修を終えたとき、長年業界に勤める上司が彼女に言った。「この仕事、小野寺さんに向いていると思いますよ。何よりも自信をくれる言葉だった」。

一度再就職を断念したときと比べ、環境が劇的に変化したわけではない。でも、何かが確かに変わってきている。答えは、彼女の心のなかにある。「自信のないとき『できない理由』を探しちゃおうと思うんです。でも、やってみてはじめて見える景色があるんじゃないかな。数年間自分と向き合ったことで、今の私は『どうやったらできるか』を考えられるようになった。きっと私には必要な時間だったんですね」。

再就職と同時期に、仕事のない日を利用して、ママが楽しむための自宅サロンもはじめた。「お花やアロマなどの講師をお招きして、リフレッシュしてもらっています。たぶん私って、誰かを輝かせることで自分が輝くタイプなんですね。ブライダルの仕事はまさに天職！40歳を過ぎてこんなに楽しい毎日を送れるなんて」と笑顔を見せた。

### 取材を終えて

私をはじめ真由子さんに出会ったのは、「再就職が決まり、明日から出勤なんです！」という日。お話しているうちに、彼女は涙を流しました。仕事への不安やそれまでの悔しい思い…きっと色々な感情があったのだろう、そう思ったことが、今回取材をお願いするきっかけになりました。再就職から半年。久しぶりに彼女と話して、浮かんだのは「晴れやか」という言葉。自分を発見し、実現しはじめた人は素敵だなぁ。

(取材・文 川村 求可)

## 子どもから教わる「知らなかった世界」



橋 友紀子さん Tachibana Yukiko

■ 37歳 浦安市在住

■ 夫・長男7歳・次男3歳

民間企業から教員に転職し、結婚、妊娠、出産。そして、現在は難病の長男と3歳になったばかりの次男の子育てに専念する橋友紀子さん。教員時代から現在のことについてうかがいました。

### 「夢が叶う」って楽しい

大学を卒業して飲食関連の企業に就職。私は結婚や出産をしても仕事を続けたいと思っていたのですが、就職して2年めくらいでこの職場では難しいと感じはじめました。そこで大学で取得した中学校の教員免許を引っ張り出し「教員をめざそう、今しかない」と思い切って仕事を辞めました。小学校や中学校の非常勤講師を務めながら小学校の教員免許を取得、採用試験にも通り、浦安の富岡小学校で教員生活がスタートしました。

はじめての担任は小学3年生。クラス替えがなく4年生までの2年間をいっしょに過ごしました。子どもの成長はすごい。出会ったとき、まだ幼さが残っていた子どもたちが4年の終わり頃には、大人の力を借りずに問題を解決しようとする。そんな姿に感激し、先生っていいなと思いました。保護者も協力的で、「飲み会」にも連れ出されましたね。4年の修了式、クラス解散のときは、子どもたちも私も大泣きしてしまいました。はじめて担任したクラス、子どもたち、私も相当な思い入れがあったのかな。

### 先生と母親の両立がこんなにたいへんなんて

教員生活をはじめてから5年めに結婚・妊娠。大きなお腹で子どもたちと関わるのはハラハラしましたが、「先生もお母さんなんだよ」という姿を見せることができよかったです。

忙しい妊娠生活でしたが無事出産、しかし翌日、生まれつきの病気を抱えていると知らされました。ただただ「なにごと？」という感じでした。聞いたことのない病名、「これからどうなるの」という不安のなか、育児がはじまりました。7か月のとき、大きな手術をすることに。術後はうつぶせで固定されたまま3週間、申し訳ないという気持ちでいっぱいでした。でも私が落ち込んでいる間もなく順調に回復、保育園にも入園でき、育休1年半で教職に復帰しました。

働かないという選択肢はなかったのですが、保育園の送迎など日々のことに加え、通院、リハビリなどに時間を取られ、24時間のすべてを仕事に使っていた頃と比べてしまうことが多かったです。土曜日に部活をみたり、夜遅くまで授業の準備をしたりと全力投球でしたから。やりたい仕事があったくできないつらい時期でした。

まわりの先生は「無理をしないで」と応援してくれましたが、100%で仕事に関われない私につき合うのは、子どもと保護者ですよ。このまま続けてはいけない気がして、退職をしました。

### まだまだあきらめない

小学1年になった息子は、2度めの大手術のあと、車いすを使うようになりました。実は手術前まではゆっくりだけ歩いたり、友だちとサッカーをすることもできたので「車いす」に抵抗があったのです。けれど、本人は不便を感じながらもすぐに器用に乗りこなしました。車いすはかわいそうという思い込みがあったんですね。車いすテニスもはじめ、「あなたにとっていいことが一番」と思えるようになりました。

もともと、仕事をしたかったので、いずれは何かをしているでしょう。仕事を辞めて4年。思いがけずやってきたこの時間で、仕事以外の世界を知ることができました。先生もいいけれど、難病の子どもの母として同じ経験を持つ人に何かできるかも。これからの「私の仕事」について、今を楽しみながら考えています。

### 取材を終えて

本文中に出てくる新任時代、彼女の教え子のひとりが私の長女。小4の修了式「お別れがいやだ」と泣いて帰ってきたのを覚えています。「飲み会」に連れ出したのもいい思い出。10年も前の話です。そんな富井先生（旧姓）に偶然再会。どこかで先生をしているかと思っていましたが、辞めていたのに驚き、取材を申し込みました。個人的には経験を「教員」として活かしてほしい！そのためには先生に100%を求める保護者じゃダメだなと自戒中。

(取材・文 伯野朋絵)

## 浦安市民活動団体 Prism! プリズム のものがたり

### この本を制作するきっかけ

2013年10月8日、「プリズムフェスタ 2013」の来場者が会場を後にし、撤収作業をはじめたちょうどそのとき、私はマイク越しに言いました。「今日の来場者数は親子1,000名です!」。次の瞬間、会場全体から歓声があがりました。

この日4回を終えた「プリズムフェスタ」は、プリズム会員の女性たちが企画、運営、出展をしている年に一度のママの文化祭です。「好き」や「得意」を発表、発信する場として、1回めは10だった出展数は40になっていました。そんな女性たちを応援するかのように、会場の外には赤ちゃん連れのママたちで長蛇の列ができました。たくさんの笑顔が出会い、無事に終えた心地よい疲労感と同時に、この笑顔の裏側にある、誰もが持っている「ものがたり」を伝えたい! そう思ったのです。



### プリズムのはじまり「想いを語り合う場所」

さかのぼること2009年12月12日。「『がんばっている』女性たちがつながる場所を作りたい」。そのひと言に集まった7名の女性たちが、自己紹介をすることからプリズムのはじまりました。月に1回、日々の生活のなかでは接点のない女性たちが次々に訪れ、やりたいことへの想いを語り合う場所になっていきました。初対面の誰かの、今まで溜まっていた涙があふれても、みんなが笑顔でうなずいていました。誰もが同じ涙を流したことがあったから。

### もっともっとつながりたい



浦安で「がんばっている」女性たちがひとりきりにならないように、いろいろな企画や活動が生まれ、みんなができることを持ち寄って実現していきました。ひとりの力は小さいけれど、みんなでできることはたくさんありました。「私知っている『がんばっている』女性たちを、もっとたくさんの人に知ってほしい」。みんなのそんな気持ちが膨らんでいきました。

### 何をどれだけ「がんばる」かは自分が決める

身近にこんなにもいろいろな女性たちがいることが、次の一步を踏み出したい誰かの元氣や勇氣になり、「私もうがんばりたい」という声は増えていきました。踏み出すタイミングや抱える想いは人それぞれ。誰ひとりとして同じ人はいないから、自己紹介が長くなります(笑)。そしていつもにぎやか。なかなか顔を出せなくてもプリズムのつながりはとぎれません。誰もが、どこかで、何かを「がんばっている」ことを、みんなが知っているから。家事や子育て、趣味や勉強、PTAや地域活動、お仕事だって。何をどれだけ「がんばる」かは自分が決める。そんな女性たちを発信し続けています。誰かの明日の一步のために。

### 広がる女性たちの活躍を応援する輪

多様なライフスタイルの女性たちが出会い、つながり、応援し合う輪は広がっていきました。今プリズムのメンバー(正会員)はおおよそ70名。浦安市内に住む子育て中の女性が多く、出産を望む女性や、子育てがひと段落した女性、浦安市外に住む女性もいます。また、そんな女性たちを応援するサポーター(賛助会員)は男女を問わず10名(法人を含みます)を超えました。浦安市も応援してくれています。地域全体で女性の活躍を応援するコミュニティになっています。



### 地域での女性活躍が明るい未来を描く

日本では、結婚、出産によって、7割の女性が結婚前にしていた仕事から離れます。浦安市の専業主婦率は全国平均に比べて高いです。子育て期のブランクをどう埋めるかと言われますが、子育て期は地域で多様な経験ができるチャンスに見えます。地域での女性の活躍が私たちの住むまちを豊かにし、将来を担う子どもたちの明るい未来につながるものと信じています。「誰もが自分らしくいられるまち」。それは誰かの小さな一歩からはじまります。

### 「プリズム」という名前への想い

私たちはみんな、それぞれの輝きを持っています。その色がひとつに集まったとき「虹」という新たな輝きが生まれます。この虹を作り出すプリズムのように、さまざまなカラーが集まり出会う場所。それが「プリズム」です。

# もうひとつのものがたり—この本ができるまで

この本の編集部メンバーは本作りに携わることがはじめての人がほとんどです。メンバーになったきっかけはそれぞれですが、女性たちのことを伝えたい、自分たちの本を完成させたい、ただひとつのゴールに向けてチャレンジし続けました。そんな編集部メンバーの一年間をお伝えします。(文・伯野 朋絵)

## 登場人物

田…田頭あやこ。市民活動団体プリズム代表  
伯…伯野朋絵。フリー編集者  
ラ…ライターのみなさん  
校…校正者のみなさん

## 2013年12月頃

田に呼び出される伯

田「プリズムでポノポノみたいなことやりたいんですよー」

伯「えっ」(それ手伝わってことだよ。ポノポノの悪夢再びか)

(注1) 浦安市男女共同参画センターで市民が編集し発行していた情報誌。田頭と伯野はかつてその編集委員だった。企画から取材・執筆まで手掛けるため、議論と原稿の書き直しが永遠に続くおそろしく力のつく編集委員会。



募集チラシ

## 2014年1月頃

田「市民活動補助金で作ります！」

伯「了解！」(マジか)

(注2) 田頭が計画、予算を立て、プレゼンの末、浦安市の補助金を獲得。本を作ることで、女性たちのスキルアップをめざす。そして、その本はたくさんの女性たちが登場する、インタビューで構成することを決定。講座と連携させて編集部を発足させることになる。

## 2014年6月

田「第1、2回伝わる文章の書き方講座、予想を上回る応募です！」

伯(チラシに偽りあり!)

(注3) 講座を受ければ伝わる文章が書ける? そんな訳ない。講座内で伯野はただただ実践あるのみを繰り返すだけ。とまどう受講者たち。それでもライター志望の勇者が15名現れる。



第1回講座のようす

## 2014年7月

田「これから、メーリングリストで情報を共有しましょう！」

(注4) 編集部メーリングリストには30名が参加。2015年3月までの間にやり取りしたメールの総数はおよそ1,700通。

## 2014年7月なかば

田・伯「じゃあ、インタビュー相手みつけて、インタビューしてきて」  
ラ「えっ!」

(注5) 講座ではインタビューの仕方、質問の立て方、写真の撮り方を伝えるが即実践を要求する田頭と伯野…。それでも、勇者ライターたちは子育てや仕事の間をぬって、しっかりインタビューをしてくる。

## 2014年7月おわり

田・伯「じゃあ、インタビュー内容を原稿にして」  
ラ「えっ!」

(注6) 講座では原稿の書き方やコツを伝えるが実際にやってみるのは大違い? 書き慣れている人もそうでない人もインタビューの感激を伝えるため文字と格闘。続々と原稿が集まる。

## 2014年11月はじめ

田「伝わる文章の書き方講座の第3回ははじめます」

伯「では書いた原稿をみんなで読みましょう」

ラ「えっ!」

(注7) インタビュー原稿は思入れが強く、主観に偏る傾向あり。数名の原稿を参加者で読み合わせ。読後感、気になる点など、忌憚らない意見が飛び交う。講座に原稿を提供してくれたライターに感謝。



第3回講座のようす

## 2014年11月

田「みんなで校正しまーす」

校「ここはどう思う?」「ママ?お母さん?統一するの?」

(注8) 原稿を校正。11名集まり、わいわいと作業。ひとりよりみんな。さまざまな見方があるから楽しい。

## 2014年11月おわり

田「伝わる文章の書き方講座の第4回ははじめます」  
伯「デザインをみていきましょう」

(注9) 川嶋明子さんに頼んだ表紙、中面デザインができあがる。タイトルもデザインに合わせて決定。「Women's story 15のものがたり」に落ち着く。



有志の校正チーム



講座終了後にパチリ

## 2014年12月

校「ここわかりづらい」「もっと具体的に」  
ラ(もう!何回修正すればいいの…)

(注10) ライター書く→校正する→ライター書く。ひとつの原稿は4、5回のやり取りを経て、デザインに回す。「伝える文章」のために校正者も必死。ライターもあきらめない。

## 2015年1月おわり

田「本を作るのって、こんなにたいへんだったんですね」<sup>(注11)</sup>

伯「ぜったい終わるから大丈夫」<sup>(注12)</sup>

(注11) 弱音を吐いたかと思えば、怒涛のメール攻撃でやらなきゃいけないことを片づけていく。田頭のエネルギーに勇気元気をもらう。

(注12) 本業が忙しく、ほんとうに完成するのか心の奥では焦る伯野。でもみんなで作り上げるこの過程が大好き。

## 2015年2月なかば

田「表紙OKですよ」<sup>(注13)</sup>

伯「OKっ!!」

(注13) デザインが出るたびに、さまざまなリクエストをつけ、デザイナーを困らせた田頭と伯野…。納得の出来。何回も何回もデザインを出してくれた川嶋さんありがとう。

## 2015年3月はじめ

田「最終確認しました」<sup>(注15)</sup>

伯「じゃあ印刷に！」

(注15) 最終チェックを終え、印刷に回す。あとは刷り上がりを待つだけ。

## 2015年2月おわり

田「インタビューのお相手に内容を確認してもらってください」

ラ（ドキドキ…）<sup>(注14)</sup>

(注14) インタビュー相手に原稿を確認してもらうことは、ライターにとってドキドキする瞬間。原稿を気に入ってくれるといいのだけど…。

## あとがき

今はただ胸をなでおろしています。「女性たちのものがたり」を伝えたい！そんな想いではじめた実際の編集作業では、ゴールが見えずに焦ったこともありました。

「伝わる文章の書き方講座」の参加者で構成されたものがたり編集部。インタビューはもちろんのこと、「誰かに伝える」ことを意識した文章を書いたり、校正作業をすることも未経験。それでも、何度も何度もミーティングや書き直しを重ね、取材相手の想いを少しでも届けようと奮闘し、その結晶がこの一冊となりました。

仕事、育児、家事の合間をぬって、時間を絞り出してくれた編集部のみなさん。この経験が花ひらくことを願ってやみません。インタビューにご協力いただいたみなさん。答えづらい質問もあったかもしれませんが、でもそのひと言が誰かを勇気づけると信じています。デザイナーの川嶋明子さん。無理難題、タイトなスケジュール、ほんとうにごめんなさい。講座の際の保育を担当してくれたみなさん。おかげでお母さんたちが安心して自分の時間を確保できました。講座の開催やこの本作りを助けてくれたプリズム会員のみなさん。プリズムの今があるのはみなさんのおかげです。

最後になりますが、編集作業のすべてにたくさんのご尽力をいただいた伯野朋絵さん。心からの感謝を送ります。

今度はこの本を手にとってくれたみなさんの「ものがたり」を聴かせてほしいと願っています。

うらやすものがたり編集部 編集長 田頭あやこ

## Women's story 15 のものがたり

2015年3月27日 初版

発行：うらやすものがたり編集部  
(浦安市民活動団体 Prism! プリズム内)

### ■うらやすものがたり編集部 STAFF

編集長 / 田頭あやこ  
編集 / 伯野朋絵 川村求可  
装丁・デザイン・イラスト / 川嶋明子

ライター / 岡林有紀 小崎乃倫子 小野寺真由子 川村求可 宝祐子 橘友紀子 田原美和  
手柴真理子 伯野朋絵 古市佳予子 矢澤有紀子 山西絵美 吉田里子 吉野智美

校正 / 天野浩子 大畑方子 岡林有紀 小野寺真由子 宝祐子 竹内有紀子 橘友紀子  
藤澤照子 矢澤有紀子 山西絵美 吉野智美

講座風景撮影 / 杉井知紗

### ■インタビュー協力

小野田恵美子 小野寺真由子 兼崎和加 川村求可 国立明子 佐野美喜子 澤田幸 宝綾子 橘友紀子  
土屋由紀 松山由加里 山西絵美 吉田里子 ランジャン善子 渡辺万里

### ■講座保育スタッフ

浦安市民活動団体 およこの広場・ほこほこ  
黒澤陽子 高野由佳子 谷口敦子 中村美恵子 長瀬美千子

### ■その他協力

石橋美香 岩戸詠美 川上みづほ 齋藤かおる 澤田幸 須合綾子 土屋由紀 安松由美香

(敬称略・順不同)

浦安市民活動団体 Prism! プリズム  
HP : <http://www.prismbayside.net/>  
プリズム事務局 : prismbayside@gmail.com

この冊子は 2014 年度 浦安市民活動補助金により制作しました。